

2 ダンテ『神曲』¹⁾



図1 地獄(その門)・煉獄島(山上の地上樂園とアダム・エヴァ)・天堂(その上)

フィレンツェの町に書を示す桂冠詩人ダンテ

(Domenico di Michelino, 1465, Santa Maria del Fiore, Firenze)

0 背景

かつて西洋にとって東洋とは何であったか、否そのまえに地球、世界はいかなるものと考えられていたか。これについては、例えばペンローズに要をえたまとめがあり、十五世紀初頭ポルトガルに始まるいわゆる大航海時代以前の歴史的背景が解説されている²⁾。著者はそこで、古代ギリシャから十四世紀までの二千年を扱うにあたって、理論・神話・現実の三層に分け、「理論」ではヘロドトス、プトレマイオスやストラボン、プリニウスらの古代地理学から中世のイスラム教とキリスト教の地理学、そして発見時代前夜の地理理論と知識を、「神話」ではギリシャ・ローマの古典、イスラム教や中世キリスト教の神話・伝説、あるいは旅行譚や伝奇物語の系譜を、「現実」では十三世紀中葉タタールの平和により可能となったカルピニ、ルブルクらの東方行（ここにはポーロ一家の旅も含まれる）によりもたらされた報告から、その後の主として地図にみられる地球像への関心や海路による東方到達の可能性を探る試みなどを、簡潔にたどっている。

それを今再びたどる余裕はないが、ここではジパングの系譜の背景として、ペンローズにならってその三つの層にポーロの同時代からそれぞれ一つを選んで比較検討し、『東方見聞録』がどのような背景の中に登場し、いかなる新しい意味をもち、それによって西洋のその後の東方観あるいは地球像がいかに変わってゆくか、あるいはゆかないかを考察するための下地としたい。「理論」（「神話」でもあるのだが）にはダンテの『神曲』、「神話」にはプレスビテル・ヨーハンネースの「書簡」とボッカッチョの『デカメロン』、「現実」にはカルピニの東方旅行記を取り上げる。

1 ダンテ『神曲』の東方

十三世紀から十四世紀にかけてイタリアは、後世に名を残す旅人をもう一人もった。マルコが故郷ヴェネツィアに還ってから五年後の千三百年のある日³⁾、「人生の旅半ばに暗闇の森」（地・I・1-2）に迷い込み、わずか一週間の短い時間ではあったが、地獄・煉獄・天国の三界を経巡ったフィレンツェの人、ダンテ・アリギェーリである。⁴⁾

この大詩人にとっては、その巡歴がまさしく旅であったのみならず、人間の人生と世界の歴史もまた旅であり、宇宙という「一切が注ぎ込むあの大海」（天・III・86）を航海する船旅のイメージが全篇にわたって貫ぬいている⁵⁾。もっとも、共

に壮大なものではあったが、しかし多くの否あらゆる点でとみえるほどに二人の旅は対照的であった。

まず、マルコの旅がユーラシア大陸という地表にそっての文字どおり空間的なものであったのに対して、ダンテの旅は天地創造の過去から最後の審判の未来へと向かう歴史の時間軸にそって、三界を想像力によって巡るという思弁的なものであった。また前者の書が、その旅の中で目にし耳にした物事、経験世界をそのままに拙い言葉で語った記録であったのに対して、後者の詩は、天と地、神と人、天使と悪魔、精神と自然、つまり形而上・下の両世界を、百般の学識と及ぶかぎりの想像力とを傾けて、彫琢された典雅な言葉で、記すといわんよりは自ら創造した作品であった。また、前者を埋めつくす東方の地と人と物は、後にみるごとくごく少数を除いて後者では一切登場しないのに対して、後者を彩るヨーロッパの古今の人と事と学は、前者ではこれまたどこにも登場しない。その意味では、これら二つは補完的に当時のヨーロッパの二つの精神を代表するものともなっている。

因みに、同じく未知の世界に案内するに当たっても、マルコが最初まずその「序」に：

この書を読まれる方あるいは聴かれる方は誰であれ、彼「マルコ・ポーロ」の言うことを信じていただきたい。というのもこれはすべて本当のことだからだ。実際、主なる神が我らが最初の父アダムを自らの手で創造されてよりこのかた、キリスト教徒であれ異教徒であれ、タルタル人^{5*)}であれインド人であれ、その他いかなる種族の者であろうと、このマルコ殿ほどに世界のさまざまな部分とその大いなる驚異を見聞し探求した者はかつて誰もいなかった、ということをご存知ありたい。⁶⁾

と誇らしげに、しかし謙虚に乞うのに対して、この「世界のさまざまな部分とその大いなる驚異」といった下界のことどもではなく、まさにここにも述べられているとおり、その「主なる神がわれらの最初の父アダムを自らの手で創造されてよりこのかた」を、現身のままに「見聞し探求した」最初にして唯一の人間と自負するダンテは、地球を離れベアトリーチェとともにいよいよ天上の世界に上りその様を語るにあたって、それがいかに前人未踏の困難な業であるかを、凡庸な人間にはとても理解できまいから付いて来るなど警告を発したのち、船旅の喩えを用いながら：

我が進む海に船乗り入れた者、まだ一人とてなし。ミネルヴァ風を吹き、ア

ポロン我を導き、九神のミューズ我に北斗の星を示さん。(天・II・7-9)

と、傲然と言い放つ。否むしろ、ダンテにとって現世とは来世への渡し場であり、その地球の表面をたどる旅なんぞというのはほとんど意味をもたず、彼にとってより実在感をもっていた彼岸の世界の巡歴こそ旅と呼ばれるにふさわしいものであった。その天上から見下ろした地球、凡夫の世界は：

そのかくもみすぼらしい姿に我は微笑んだ。ゆえに我、地球を賤しいとする考えを最善と見做す。他〔天上世界〕に想いをはせる者こそ真に有徳の士と呼ばれてふさわしい。(天・XXII・134-138)

「みすぼらしい」か否か、「賤しい」とすべきや否やはさておき、ではダンテの地球は物理的にどんな形をしていたか、この十四世紀初めの詩人の宇宙像とはいかなるものであったのか。

厳密な天文学的構成をもち、旅の経過が星辰の運行によって示されるこの宇宙旅行記では、その地球像は様々な箇所からうかがうことができるが、例えば、煉獄の最西端、いよいよ地上樂園に通ずる小路の入り口のところで：

その創造主が血を流した所に、最初の光が射すとき、イベロは高き天秤宮の下にあり、ガンジスの波は真昼の太陽に熱される。日はちょうどこのような位置にあり、今しも暮れなんとしていた。(煉・XXVII・1-5) ⁷⁾

『神曲』では、地球上の地点は常に、いわばその外円上に九十度の間隔をおいて配された四つの定点からの距離によって決められ、時刻は黄道帯の天宮をめぐる太陽の位置によって測られる。その定点とは、ここにみられるように、エルサレム（「その創造主が血を流した所」）、煉獄山（今ダンテのいる所）、イベロ川（スペイン）、ガンジス河（インド）の四つである。そして、エルサレムは陸半球である北半球の中心、いわば頂点にあり、水に覆われた南半球の、地球の中心をはさんでのその正対蹠点にそびえるのが煉獄山である。また、ガンジス河とイベロ川はエルサレムから（したがって煉獄山からも）それぞれ真東西九十度の地点にあり、北半球にある陸地の東西の両端をなす。先に引用した連はしたがって、エルサレムが夜明けのとき、（東から西へと運行する）太陽はすでにガンジス河上にあって（インドは）真昼であり、（その百八十度向いに当る）イベロ川（のあるスペイン）は真夜中、そして（ここ）煉獄山では今夕暮れを迎えている、と。

ここからもわかるとおり、ダンテはエルサレムを世界の中心に据えるという点

では伝統的な聖書地理学に従い、一方平板な地球という説は捨て、当時すでに一般に受け容れられつつあった球体説に拠って、平板だった陸地をその球体の表面にいわば曲げてくるます形にする。そして南北両半球を水陸に二分し、未知の大陸の代りに南半球を「その海に船を乗り入れてまだ還って来た者のない」（煉・I・131-132）未知の海とし、その果てに古代の対蹠大陸のように煉獄島を出現させ、教父地理学では東方に想定されていた地上樂園をその山上に置く。ダンテの地球は、このように論理的・神学的かつ科学的に考え出された独創的なものであった。

さらに、地獄はエルサレムの真下から地球の中心に向かって漏斗状にくぼみ、その中心からは忘却の河レーテの水脈にそって煉獄の島にたどり着ける。その山上にある地上樂園から天国に至り、月天から始まって神のまします至高天まで十の天が重層的に地球を包む、という構造をなす。もちろん天動説で、地球は宇宙の中心に在る。

したがって、ダンテにとって知見の及ぶ限りの陸地とは、北極圏に近い人住まぬ地を北限、アフリカ大陸赤道直下を南限、スペインや北アフリカの西岸を西限、そしてインドを東限とし、それが東西百八十度にわたって広がっている、というものだったことになる⁸⁾。ジパングはもちろん、プトレマイオスの地図にははっきりと見られた黄金半島（マレー半島）もセリカの地（中国、絹の国）もシナの地（インドシナ）もタプロバーナ島（セイロン島）も存在しない⁹⁾。世界の東の果てに想定されていた地上樂園も、すでにみたごとく、南半球の洋上に移された。かくして東方は、著しく狭くかつ貧しくなった。以上が、「理論」といえば理論である。

とすると、思わず「微笑ま」ざるをえないのは、「かくもみすぼらし」かったのは、当時すでに、ポーロ一家の旅そのものがその雄弁な証拠であるように、陸・海路で交通が開かれ、様々な情報と物質がもたらされていた事実を考え合わせるならばなおさら、ダンテのまた中世ヨーロッパの学的な地球像であったと言わざるをえないはずだが、そのことにはダンテ自身もいささか気づいていたとみえて、天上にあって地上を見下ろしながら、例えばヨーロッパ以外の地や裏側の半球に何ら言及しなかったことに学者として負い目を感じたのか、いよいよ原動天に昇る前、ベアトリーチェに促されて地球に最後の一瞥をくれるとき、言い訳するかのように感想をもらす：

カデイスの彼方にはオデュッセウスの狂気の航海が、此方にはエウローパが甘美な荷となった岸近くまでが、見えた。そして、この小さな麦打ち場のもっと多くの所が我に見えただろうが、太陽はすでに我が足もとから黄道の一宮よりさらに離れたところを進んでいた。（天・XXVII・82-87）^{9-1)*}

もし太陽の位置さえ違っていたなら、スペイン沖（「カディス島のかなた」、ジブラルタル海峡）からフェニキアの岸（「エウローパがゼウスに奪われたところ」、エルサレムと同一子午線上）までの範囲だけでなく、地球（「この小さな麦打ち場」）のもっと多くの部分が見えたであろうに、と。

しかしながら、ダンテの知見と視界は実際にはまさにこの範囲、スペインからエルサレムに至る地中海にそったキリスト教世界にほぼ限られていた。天上にあって地球全体を鳥瞰しながらも、これから見るように、それ以外の地域が地点として引かれることはあっても、そこに住む人々や生起する事象が目にはされ語られることはついにないのである。今引用した箇所を例にとるならば、二千年前のオデュッセウスの航海をスペイン沖に目ざとく見つけても、わずか数年前アジアの砂漠、元の街路、また南海に現実印されたポーロ一家の足跡に気づくことはついにない。宗教的・政治的のみならず文明的にも一元論に立つダンテにとっては、キリスト教世界が全てであり、その名のもとに「全世界」を語ってはばからなかった。

では、その「全世界」の中で、キリスト教世界以外の世界、そして東方は何であったか。つまり、パラダイムという観点からは、東方はどのような知の体系の枠組の中に組み込まれ、いかなる役割を担わされているか、また「異化」という観点からは、いかに「自」から区別され「異なるもの」とされているか、もう少し詳しく具体的に見てゆく。

キリスト教ヨーロッパを世界の中心に据えれば、他の地域は当然地理的にも文明的にも周辺となる。その周辺は、たとえ実際より著しく小さいものに考えられているにせよ¹⁰⁾、ヨーロッパよりはるかに広大な幅と多様性を有するはずなのであるが、それに興味を抱かずまた情報も乏しかったダンテにとっては、すでにみたごとく、広がりの中身をもった面であるよりは、学の体裁を装うその地理学の中でユーラシア大陸を限るに必要な点と線でしかない。つまるところは、最も遠い所、世界の「最果て」である。そしてその最果て性は、地理と何よりも関係の深い気象とまず結びつけられ、温暖で四季をもつ地中海地域と比べてなおさら、その異常な暑さ寒さが強調されることになる。

北の果ては、古くからユーラシア大陸の北限にあると考えられていたリーフェイ山脈であり、南の果てはいうまでもないが、リビアあるいはエチオピアの名で呼ばれるアフリカである：

そして、一方は太陽を恐れてリーフェイの山の彼方へ、もう一方は寒さを恐れてリビアの砂漠へと向かう鶴の群のように、一群の人々は左へ、もう一群の

人々は右へと分かれて行った。(煉・XXVI・43-46)

東の果てはインドであるが、そこはダンテの地球像にあっては、中世キリスト教地理でいうところの日の昇る方向、エデンの園のある所としてのいわゆるオリエントではない¹¹⁾。むしろその最果て性が強調され、しかもそのガンジス河は、人間の棲息可能な北半球の陸地を七つの気候帯に分ける、ダンテもそれに従った古代からの地理観では、西の果てスペイン、中心エルサレム、その中間に位置するローマなどと同一気候帯、ほぼ同一緯度上にあると考えられているにもかかわらず¹²⁾、アレクサンデル伝説によったためか、それとも当時インドとエチオピアはしばしば混同されたという事情によるのか、奇妙なことに自らの地理学の体系性と論理性を壊してまで、インドも酷熱の地として扱われる。

例えば、煉獄にあるにもかかわらずダンテが生身の肉を持つ者のみが作る影を地に落としていることを不思議と思つた一つの霊が、その理由を知りたがって聞く様は：

それを渴望すること、インド人もしくはエチオピア人が冷たい水を欲しがるよりもさらに飢えていた。(煉・XXVI・20-21)

しかも注目すべきは、この例からも明確にうかがえるように、アフリカにせよインドにせよそれらの地自体が叙述の対象とされるのではなく、他の何かの、結局はキリスト教世界の事象の喩えに利用されるにすぎないことである。しかもそのとき、その暑さ寒さの異常性ゆえに、多くは否定的な場面に用いられ、悪しきイメージに結びつけられることになる。因みに、ここでのインド人やエチオピア人の水への渴望は、肉体的な飢えの象徴としてキリスト教徒の靈魂たちの知識欲に対比されているし、また先に引用した左右に分かれて飛ぶ鶴の群に喩えられているのは、一群は「自然の掟に背いた」男色漢であり、もう一群は「人の掟に背いた」淫欲の徒であった。

とすると、残忍非情な刑罰が執行される「異常」の世界そのものである地獄界において、これらが恰好の事例と喩えを提供することは容易に想像がつく。例えば、地獄の最後の圏で極悪の裏切り者たちが氷漬けの刑を受けているコチートの沼は：

オーストリアのドナウもはるか寒空の下のドンも、冬その流れにこれほども厚い氷を張りはしなかった。(地・XXXII・25-28)

地獄の第七圏熱砂の荒野は、神・自然・技術に対して暴力を働いた者が火責めの刑にあっていてる所だが、ここではアレクサンデル大王伝説が援用される：

インドのかの熱帯でアレクサンデルが、その軍隊の上に焰が地上に達するまで燃えつきずに落ちるのを見た……ごとく永劫の火は降りそそぎ、火打ち石の下火口のように、砂は焼け苦痛を倍加していた。(地・XIV・31-39)

その地獄を支配するのは、神に背いて天国から墮とされ、南半球を突き抜けて地獄の中心に逆様に突き刺さっている墮天使ルチーフェロなのだが、この悪魔は三つの頭部をもち、その顔の：

一つは前を向き、真っ赤だった。そして右の顔は白と黄の中間、左の顔は見るところ、ナイルが発する所から来た人々の色そっくりだった。(地・XXXIV・39-45)

ダンテがすでに顔の色の人種的な違いをかくも露骨にしかも正確に描写していること自体興味深いが、ここで三つの顔とは神の三位一体のアンチテーゼであり、その色は中世イコノグラフィーの伝統にのっとり、「真っ赤」は嫉妬もしくは怒りを、「白と黄の中間」は無力を、「黒」は無知を象徴する。¹³⁾

このようにして繰り返し利用される地理的極限性と気象的異常性以外に、東方に関してこの作品に出てくるのは、つまり作者ダンテのもっていた知識と情報は、わずかながらやはりそこからやって来ることが知られていた珍しい産物である。しかしながら、すでにみたごとく土地の場合と同じく、その産物自体の価値や美しさが叙述の対象となるわけではなく、ここでもダンテの文体の大きな特徴をなす喩え（アレゴリー）の仕組みの中に取り込まれ、キリスト教世界の事象を引き立てる添え物としての役割を担わされることになる。例えば、ヴィルジリオとともに夜露をしのぐ煉獄の一つの窪地は：

黄金や純銀、コチニールや白鉛、澄んだ光沢のあるインドの樹¹⁴⁾、割ったばかりの真新しいエメラルド、それらをこの谷間に並べても、小が大に負けるごとく、どれもその色、この草花にはかなわぬだろう。(煉・VII・73-77)

また、エデンの森をおおう喬木、アダムたちがその禁断の実を食べた智恵の樹は：

その葉の茂みは上へ行くほど広がり、森に住むインド人さえその高さに驚嘆するだろう。(煉・XXXII・40-42)

古来何よりも名高かった東洋の産物、絹の織物への直接の言及はない¹⁵⁾。しかし博物学者ダンテは、それが蚕の口から吐き出されることは識っていた。天堂にあって神の祝福の光にくるまれて誰だかわからぬ一人の至福者の霊は言う：

自らの絹で身をくるむ虫のごと、周りに輝いて我を包む我が歓びが、そなたの眼から我を隠す。(天・VIII・52-54)

彼自身の考案した地球上にセリカの国は存在しなくとも絹は識っていたように、モンゴルも元も存在しなくともタルタル人の名は伝わっていた¹⁶⁾。しかしそれは、百年もたたぬ前ジンギス・カンやその子孫に率いられてハンガリーやポーランドにまで侵攻し、イタリアの対岸ユーゴスラヴィアにまで姿を現わしてヨーロッパを震撼させ、教皇庁をあわてふためかせた出来事によってでも¹⁷⁾、当時すでに評判となっていたポーロの旅行記の噂を耳にしたがためでもなく、その模様や装飾の見事さが知られていた絨緞ゆえにである。

異端と暴力の罪人を罰する地獄の第七圏と欺瞞者を容れる第八圏をへだてる断崖絶壁を、ヴィルジリオと共に背に乗せて降ろしてくれる人面蛇身の怪物、「不潔きわまる欺瞞の化身」ジェリオーネは：

背にも胸にも両脇にも、縞紋様や輪の飾りが描いてあった。タルタル人もトルコ人も、これほど多彩な地と紋の織り物を作ったことはなく、またこれほどの布がアラクネーによって織られたためしもない。(地・XVII・14-18)¹⁸⁾

こうした形であれそれなりに嘆賞されているこれら珍貴な品々も、奢侈や所有の対象となるとき、ダンテの筆は苛烈を極める。絹とならぶもう一つの東洋の特産品香料は、フィレンツェの仇敵でその浪費・美食ぶりが知られていたシェーナを非難する恰好の材料としてもち出される。「シェーナ人ほど軽薄な人々がかつてあったのでしょうか」とのダンテのヴィルジリオへの問いに、偽造の罪でライ病にかけられている亡霊の一つが脇から皮肉をこめて応えるに：

そうした種がよく育つ菜園で、丁字の贅沢な用い方を初めてあみ出したニコロは違う。(地・XXIX・127-129)

東方はまた、金銀宝玉の産地としても知られていた。その美や価値は煉獄や天国の美しさ、清らかさを称揚するためにはひんぱんに用いられる。例えば、ようやくたどり着いた煉獄の、地獄の光景にすさんだ心を和ませる穏やかさを詠うところで：

清らかな空中に満ちわたっていた東方産サファイア¹⁹⁾の麗しい色は、第一円にいたるまで曇りなく澄みきって、…… 私の眼に再び歓びを取りもどした。
(煉・I・13-16)

東方産であるにせよないにせよ、しかしそれが一たん現世の富と物欲の対象となれば、腐敗墮落の根源として弾劾されることは言うまでもない。その例は枚挙にいとまがないが、例えば、神の代理人としてとりわけ精神世界に身を限るべきにもかかわらず、その貪欲ゆえに目がくらみ財宝をあさった罪で、地獄の底近く岩の穴に逆様に突っこまれて足を焼かれているかつての教皇たちに投げつけられる指弾の言葉は：

汝らは金と銀で神を作った。汝らと偶像崇拜の徒との間に何の違いがある、彼らは一つの、汝らは百の偶像を拝む以外に。(地・XIX・112-114)

ここで引き合いに出されている「偶像崇拜の徒」とはしかし、マルコがやはり非難の意をこめて仏教徒やラマ教徒を指すのに一貫して用いた「偶像崇拜者」と同じではなく²⁰⁾、むしろキリスト誕生以前の、ギリシャ・ローマの神話を含む古代異教徒のことである。もっとも、後に触れるが、東洋の文化について何の知識も関心も持ち合わせなかったダンテが、仏教を始めとするその宗教について知ったならば、イスラムに対してと同じように激しい罵倒の言葉を惜しまなかったであろうことは疑いないが。

さてこのように、空間的・地理的にも時間的・歴史的にも「周辺」であった非ヨーロッパ・キリスト教世界が、異常な寒暑や珍しい産物に代表される「異なる」世界であったように、精神的・文化的にもそれは「異なる」世界、すなわち「異教」であり、したがってまた理の当然であるがごとく文明的にも「異なる」世界、すなわち「野蛮」であると導き出されることは容易に想像がつく。まず歴史的には、帝政論者ダンテにとっては古代文明の中心であったローマに対する北方の蛮族であり：

…… [北限の] 地からやって来た蛮人は、…… ローマとその壮麗な業を見て

驚きのあまり声もなかった ……。 (天・XXXI・31-36)

同時代では、キリスト教徒に対すとりわけイスラム教徒である。愛してやまなかった故郷フィレンツェの、特に女性の風紀の乱れを同郷人フォレーゼ・ドナーティに慨嘆させて：

その時、フィレンツェの恥知らずな女どもに、乳房の胸もあらわに出歩くことが説教壇から禁じられるだろう。どんな野蛮の女が、どんなサラセンの女が、裸を覆わせるのに、聖であれ俗であれ布告を必要としたことか。(煉・XXIII・100-105)

しかも、こうして「野蛮の女」と「サラセンの女」を並べることによって、古来から未開や暴力とならんでオリエントのもう一つの抜きがたいイメージであった官能性や淫蕩にあてこすることを忘れてはいない。²¹⁾

戦闘的なキリスト者であり、十字軍遠征は一昔前だったダンテは、イスラムに対して罵詈雑言と断罪を浴びせることを辞さない。地獄の下層の始まりをなす異端者の町ディーテの城壁はイスラム教寺院風に造られ(地・IX, X)、マホメットともう一人の教祖アリは分離と不和の種をまいた罪により最下層で八つ裂きの刑にかけられて(地・XXVIII)、異教イスラムは何にもまして憎悪と敵意の対象である²²⁾。十字軍遠征に加わり教敵の手にかかって戦死したが故に天国に召されている自分の先祖の一人カッチャグィーダは誇る：

私は……そなたらの権利を奪ったかの民の不法に対して戦いに行った。その地で私は、あの穢れた奴らの手にかかり、この虚偽の世から解き放たれた。(天・XV・142-146)

しかしながら、非キリスト教世界がすべて一様に捉えられているわけではない。ヨーロッパ・キリスト教世界のすぐ外に位置し、それを取り巻く回教圏がこのように直接の敵であったのに対して、さらにその外に広がるアジアは宗教的にも文化的にも敵や対立者ですらなかった。酷暑とか最果ての断定は与えられても、「異教」とか「野蛮」の言葉を直接投げつけられることすらない。そこにインド人以外のどんな人間が住んでいるかも、どんな社会と文化があるかも、さては異教・仏教のあることすらも知らなかった。つまり、サラセン以遠の東方はダンテの学と知の世界の中で、すでにみたその地理的特徴以外、具体的に何らの内容ももたなかった。²³⁾

しかし、かといって東方がダンテにとってこれからその中身を描かれるべき広大な空間、後の探険家たちをかり立てたような幻想と豊饒の未知の地として白く残っているわけでもない。否、実は、すでに彼の世界像の中にゆるぎなく組み入れられ、その思想によってはっきりと着色され、来たるべき役割を期待されるところとして存在しているのである。すなわち、キリスト教徒ではないがはっきりと敵でもない人間たちの住んでいるところ、として。その象徴的な例が次の場面であろう。そこでは、かろうじて個としての肉体と精神を備えた一人の東洋人、インド人が登場するのであるが。

木星天で正義の象徴であるローマ帝国の紋章鷲の形に集う、正義を実践した過去の統治者たちを前に、キリストを知らないというだけの理由で断罪されるのは正しいか、というもっともな疑問をダンテは次のような形で問う²⁴⁾：

おぬしは言えり、インドゥスのほとり一人の人間の生まれ、そこキリストについて語る者、読む者、書く者なし、

されど、人間理性に照らし、その思い行いすべて善し、その生と言葉に何の過ちもなし。ただ、洗礼を受けず、信仰もたずして死ぬ。

その者を断罪するこの正義、どこにありや、信仰しなかったとて、その罪、どこにありや。(天・XIX・70-78)^{24-1*)}

ここでインダス河は、例によって地理的に最も遠い地として持ち出されているにすぎない。しかしながらそこは、ダンテの世界像の中でこの問題を設定するのに精神的・文化的に最も適わしい場所でもあった。何故ならそこインドは、イスラム教徒でも何教徒でもなく宗教的には自紙で（「キリストについて語る者も読む者も書く者もない」）、文明的には貧しく未開だが野蛮ではなく（「人間理性に照らしてみてもその思いも行いもすべて善く」）、精神的にはヨーロッパ的な学はなくとも高い知性と倫理性を兼ね備えた（「その業と言葉において何の過ちもない」）、キリスト教信仰を受け入れるに十分な素質のある人間が住み、その布教と魂の救済を待ち受けているべきはずのところだったからである。この文脈でのみ東方は面として、つまり具体的に知と想像力の対象として存在していた。

われわれはこれが、ジンギス・カンの登場とともにプレスビテル・ヨーハンネースの国をモンゴルの地に求めた当時のキリスト教徒の心理であり²⁵⁾、後に続々と繰り込んでくるあの宣教師たちの布教の論理であること、さらにまた、ここに想い描かれているインド人のイメージ、いわゆる「期待される人間像」が、後にヨーロッパ人が現実的に「発見」したときに抱いた異人種に対する最初の印象と正確に同じものであることを知る。例えば、日本人についてならば、ザビエルやヴ

アリニャーノらイエズス会士の書簡や報告を紐解くだけで充分であろう：

第一に、私たちが交際することによって知りえた限りでは、この国の人びとは今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で、悪意がありません。驚くほど名誉心の強い人びとで、他の何ものよりも名誉を重んじます。大部分の人びとは貧しいのですが、武士もそうでない人びとも、貧しいことを不名誉とは思っていません。²⁶⁾

一方、こうした形で取り込まれ閉じられてしまっている東方に対して、ダンテの世界像の中で唯一開かれた部分として残っているのは、西方であった。西方とは、スペインと西アフリカのかなたに広がる広大な海のことであり、そのイメージはかの著名なオデュッセウスの航海によって代表される。いよいよセヴィリアとセウタにはさまれたジブラルタルの柱を過ぎ、禁断の海に乗り出すとき、オデュッセウスは仲間を励まして言う：

おお、数限りなき危険を冒して西へ来たり着きし兄弟たちよ、もう我らが生きていられる日も、残り少なくなったが、太陽の沈む彼方、人棲まぬ世界を識るという経験を逃し給うな。おぬしらの起源を思うがよい、獣のごとく生きるために造られたのではない、人の道と知識を追い求めるためだ。(地・XXVI・112-120)

ここでオデュッセウス一行が航行するのは、「その海に船乗り入れてまだ還って来た者の誰もいない」といわれる南半球の大洋であり、目指すはダンテがその果てに据えた煉獄島である。一行は、神の許しなしに生者は煉獄には行けないとの「天意」により、その山影を遠く望む所で沈没させられ、オデュッセウスは謀りごとを巡らせたと地獄に墮とされているのだが、作者はこの航海を英雄的な偉業として共感と励ましの念をこめて語っている。

ダンテが自らの巡歴を一貫して船旅に擬していることはすでに述べたが、ジブラルタルを越えて西に乗り出したまま消息を断ったと中世には信じられていたこのギリシアの英雄は、現身のまま三界を巡ることを得た自分のまさに先達であった。このようにダンテにとって探険すべき未知の世界とは、大陸に残る現世の未発見の国々ではなく、確かにこの世のどこかに存在するのだが、南半球の洋上にあると確信しながら、彼自身も想像力によってしかたどり着きえなかった煉獄島であり、その山上にあるという地上楽園であった。この自分の船旅との類似性を暗示さすがごとく、かの先達の「狂気の航海」を天上から地球への最後の一瞥で

も取り立てて書き記していたことはすでにみた。

西方への航海を英雄的に詩うこの著名な箇所が、よく言われるごとく百年後に始まる大航海時代の到来を予告するものであったとすれば、キリスト教の正義の審判の前に立たされるかのインド人の箇所は、これまた前後して始まり、後に高まるアジアへの伝道の波を予告するものだったと言えよう²⁷⁾。その意味で『神曲』は、中世の終曲であると同時に近世の序曲でもあつた。

しかしながら、現実の大航海時代の探險が、ここに詩われたオデュッセウスのような、あるいは西欧の史家がそう信じたがらせるような、知識欲ゆえの未知の世界の探求であるよりは、コロンブスやマジェランの探險が実際そうなったごとく、ダンテが弾劾してやまなかった黄金の探求と物資の掠奪や土地の征服へとなっていたように、アジアへの伝道も現実には、その結末が今も明らかなごとく、彼らの期待したような実を結ぶことはついになかった。その後の歴史は実際、ダンテの願いとは裏腹に、彼も引用したアエネーイスの「おお、黄金への聖なる飢えよ、お前のいたらぬ人間の欲がどこにある」（煉・XXII・40-41）との言葉どおり展開してゆく。その意味では歴史の女神はダンテよりマルコに微笑み、後の人々をして煉獄島よりは黄金島ジパングを探し求めさす。因みに、前のダンテの問いかけに対する正義の霊たちの答えは：

わが歌の調べの、その意味がわからぬそなたにとってのごとく、かの永遠の審判も、そなたら死すべき人間にはわからぬものなのだ。（天・XIX・97-99）^{27*）}

すなわち、神意は人智には測り難い、と。

以上が、『神曲』に現れる東方のほぼ全てである。かくのごとく、東方についての情報と知識は当時一般に極度に乏しく、ダンテはまた特に関心も持っていなかった。しかしながら、今までたどってきたことから明らかなごとく、かといって東方が神秘と幻想の地、異質な文明の存在するやもしれぬ未知の国々として豊かに想い描かれているわけでもなかった。神話・伝説や聖書に出てくる妖怪変化や悪魔をすべて地獄に登場させ、また自分自身も奇抜な罪人の群を生み出したように、ダンテにとって神秘と幻想の地とはまさに彼自身が経巡った地獄・煉獄・天国の三界なのであって、悪であれ善であれその深い豊かさに比べると、下界地球は、たとえ未知の土地であれ貧しいイメージすらかきたてるものではなかったのである。

東方は、彼の知の体系の中で、地理的には東の最果ての地として、精神的・文化的にはこれから教化されるべき神も文明もなき民の地として、いずれも地中海

にそったヨーロッパ・キリスト教世界の周辺、また「辺獄」と共通する問題として論じられていることからうかがえるとおり、まさに「辺土」として位置づけられていた。あるいは、よく喩えられるごとく、『神曲』を中世ゴシックの壮麗な大伽藍に見立てるならば、その外壁や底の下にあって聖堂を守るために配されているユーモラスな動物たちか、その内陣の荘重さを対照的に映し出すために見せしめにされている妖怪か悪魔たち、あるいは聖なる彫像たちの周囲にあってそれを引き立たせるために添えられている、そして多くの場合異様な、飾りにすぎなかった。

以上のごとく、東方に関する限りダンテの世界は確固とした枠組の中にもはや閉じられており、その知と学の体系の中で明確に位置づけられていた。そしてその枠組と位置づけは、これからたどっていくごとく、彼だけの特別なものではなく、当時のまた後の西欧世界に多少とも共通のものとして基本的に変ることなく受け継がれていく。したがって、たとえ後に東方に関する情報が増えても、その枠組の中に詰めこまれるだけのことであり、新たな土地が発見されても、ヨーロッパ人の地理的知見の枠がさらに拡大するだけの話であった。実際、ポーロ等によりその後続々ともたらされる情報も、空想譚としてのその書の受けとめられ方や、この頃から盛んに作成され始める世界地図の空白部が相変わらず怪獣や妖怪で埋められるように²⁹⁾、この枠組の中に貯えられ配置されることはあっても、その枠そのものを破壊することはついにないのである。³⁰⁾

- 1) * [初出：《愛媛大学教養部紀要》第 21 号、1988、pp. 76-91。今回新たに、引用箇所（一部）の写本コピーと原文転記を加えた。]
- 2) ボイス・ペンローズ『大航海時代——旅と発見の二世紀』荒尾克巳訳、筑摩書房 1986。第一章「背景=古代と中世」pp. 3~27。原著は、Bois Penrose, *Travel and Discovery in the Renaissance 1420-1620*, New York, 1962。ペンローズにはダンテ(1265-1321)およびボッカッチョ(1313-75)への言及はない。
- 3) 西暦 1300 年復活祭前の聖木曜日から聖金曜日にかけてに設定されている。『神曲』の執筆は 1310-1320 年頃。
- 4) *La Divina Commedia*, a cura di N. Sapegno, 3 vols, Firenze, Le Monnier, 1977. 他に *La Divina Commedia*, a cura di T. Di Salvo, Bologna, Zanichelli, 1987 を参照した。邦訳では、山川丙三郎訳、全三巻、岩波文庫、昭和 33 年、および寿岳文章訳、全三巻、集英社、昭和 62 年、を参照した。(地・I・1-2)は、地獄篇第 1 歌 1-2 行を表わす。以下、煉は煉獄篇、天は天国篇。* [冒頭箇所写本、図 5・10・11・12]
- 5) 例えば、地球の悲惨を抜け出た煉獄の冒頭は次のように希望を感じさせる穏やかな調子で始まる：

「麗しの海を走るため、我が才の小舟は、あれほど酷かった海を後にして、今帆を上げる」(煉・I・1-3)

また、天国を語るにあたっては意気浩然と調子は高い：

「わが雄々しい船の波切り行く航路は、小さき船の、あるいは労惜しむ船頭の船路にはあらず」(天・XXIII・67-69)

5) * [初出では「タタル」としたが「タルタル」に改める(以下全て)。]

6) Marco Polo, *Il Milione*, a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze, L. Olschki, 1928,により、同時に同編者によるそのイタリア語訳、Marco Polo, *Meraviglie del Mondo*, Milano-Roma, Treves, 1932,を参照した。邦訳では、愛宕松男訳注『東方見聞録』二巻、平凡社 東洋文庫、1970、を参照した。章立ては前述 Benedetto のイタリア語版に従い(そのは底本となった前掲フランス語版とは異なる)、引用はここでは章のみを記した。[]内は筆者注、以下同。同書の諸写本・諸版本については後にマルコ・ポーロの章で触れる。 * [拙訳『世界の記―「東方見聞録」三版対校訳』名古屋大学出版会、2013]

7) 『神曲』の宇宙像の図解は大抵の版に掲げられているが、この箇所の理解には、爾永信美『幻想の東洋』青土社、1987、p.157 に転載されている、Boyde, *Dante, Philomythes and Philosopher*からのもの(下図)がもっとも分かりやすい。

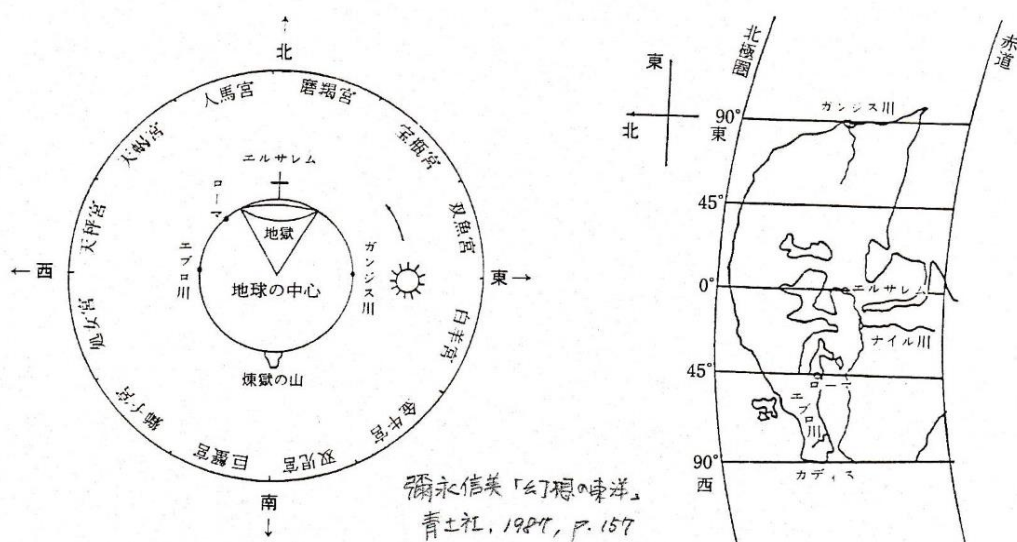


図2・3 ダンテの宇宙像・地球図

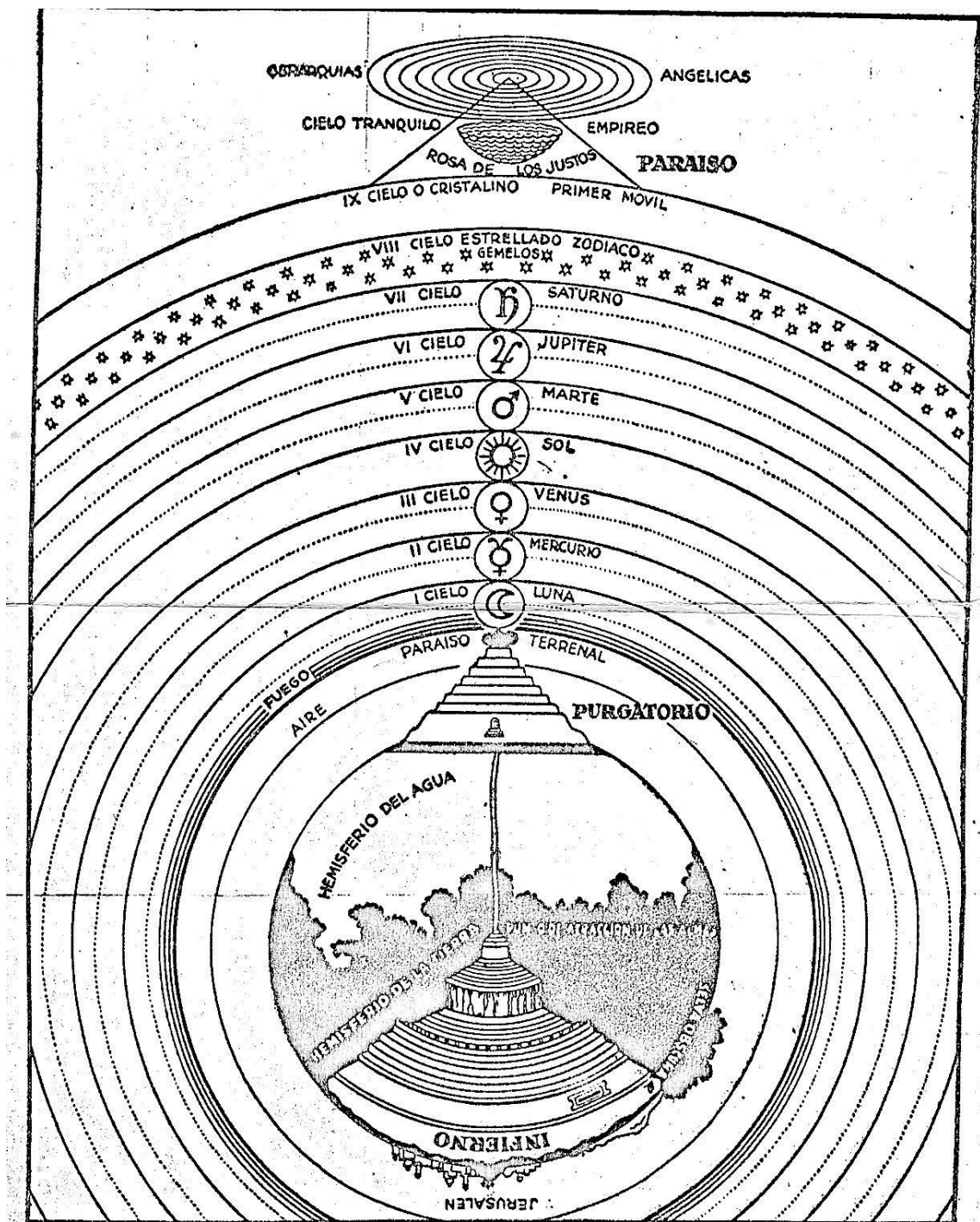


GRÁFICO GENERAL DE LA DIVINA COMEDIA

図4 「神曲」宇宙像図解

8) 南北については、その北限が北極圏にまで及んでいるのか、アフリカ大陸は赤道

をこえて南半球にまで広がっているのか、についての明確な言及はない。

ダンテの宇宙像の原型はすでに『饗宴』(ca. 1304-7)にみられる(*Il Convivio*, a cura di G. Busnelli e G. Vandelli, Firenze, Le Monnier, 1954, vol. I, Tratt. III, Cap. V, pp. 301-16)。また最後の論文『水陸論』(1320 年)にも地球の形状についての考察がある。そこでは、「黄道帯の極は地球の極から約 23 度しか隔たっていないから、[棲息可能な陸地は] 当然緯度において 67 度以上に広がっていることはありえない」とはっきり述べてある(*Questio de Acqua et Terra*, in *Tutte le Opere*, a cura di L. Blasucci, Firenze, Sansoni, 1965, p. 381)。ここでは、彼の宇宙像の典拠やその形成をたどる余裕はない: cf. James Dauphine, *Le Cosmos de Dante*, Paris, Les Belles, 1984。

- 9) もっとも、プトレマイオスもインドから東限のシナイ人の地までを「大アジアの最果ての部分」と呼んでいる(『プトレマイオス地理学』織田武雄監修、中務哲朗訳、東海大学出版会、1986、p. 115)。しかしダンテは、プトレマイオスではアフリカの南端からインドシナ半島につながっていた南半球の未知の大陸を取り払い(その代りに煉獄島を置いたわけだが)、内海となっていたインド洋を外洋とした点では近代の地理学に近い。ただし、ラテン世界でのプトレマイオス『天文学』(アルマゲスト)の紹介が十二世紀であったのに対して、『地理学』は十五世紀に入ってからのことである(1406 年ヤコボ・アンジェロのラテン語訳)。『プトレマイオス地理学』トパガーニ、織田武雄他解説、岩波書店、1987; 織田武雄『地図の歴史』講談社、昭和 48 年、等参照。

9⁻¹) * [写本、図 7]

- 10) スペインからエルサレムまで実際は約 45 度、プトレマイオスでは約 65 度。エルサレムから東限へは実際は(日本まで)約 110 度、プトレマイオスでは(中国まで)約 115 度、ダンテではいずれも 90 度だが、これには 9 という神秘的な数字の影響が指摘される。
- 11) オリентが固有名詞として出てくるのは唯一下記の箇所であるが、それもアジアのことではなく、聖フランチェスコの生地アッシジを日の昇る所に喩えてのことである: 「春分のとき日がガンジスから昇るように、一つの太陽が世に出た。しかし、この場所のことを言うのに、アシェージと呼んでは意をつくさない。正しくはオリентと呼ぶべきだ」(天・XI・50-54)

また一般に神の恩寵のやってくる方向という意味で東方(東の方向)が用いられている箇所としては下記がある: 「その霊は両手を合わせ高く上げ、「他のことは念頭にない」と神に向かって言うかのごとく、東方をじっと見つめた」(煉・VIII・10-12)

- 12) 前掲図(注 7) 参照。

- 13) 黄色人種という概念が形成されるのはずっと後、近代に入ってからのことである。

- 事実、マルコも後の宣教師たちも中国人や日本人を「色日い」と記している。
- 14) 諸注によれば、黒檀の類。ただし indaco(インジゴ藍)に作るテキストもある。
- 15) 古来あれほど貴顕によって求められた絹衣裳の贅沢への言及がないのは不思議だが、とりわけ聖職にある者の華美な服装に対する非難は、地獄で偽善者が着せられる、表は金色燦然だが裏は鉛でできた合羽に寓意されている(地・XXIII)。このマントの表は絹でできていたことを想像させる(ポーロでは「金と絹の織物」、錦織のこと)。
- 16) ただしダンテでは、いわゆるモンゴル人ではなく、「南ロシアとバルカン半島との間に住む人々」のこと(G. Siebzeher-Vivanti, *Dizionario della Divina Commedia*, Milano, Feltrinelli, 1965, p. 631)。
- 17) モンゴルの西征は、ジンギス・カンが 1219-24 年、バトゥが 1236-43 年、ドイツ・リーグニッツの戦いは 1241 年：岩村忍『蒙古の欧洲遠征』三省堂、昭和 16 年、参照。
- 18) いわゆる今でいうペルシア絨毯のことであろう。マルコではモスル国(チグリス河上流の Mosul、第 24 章)のところで、「モスリンと呼ばれる金糸絹織物はすべてこの国で作られる」とある。その他にも職業柄各地の高価な織物に関する記述は多いが、しかし特にタルタル人と豪華な織物とを結びつけた箇所はない。* [写本、図 8]
- 19) 諸注によると、メディア産サファイア。マルコでは、ケルマン王国(ペルシャ東南部 Cherman、第 36 章)に、「トルコ玉と呼ばれる宝石が産する」とある。サファイアはメディア・ペルシャ地方の記述には出てこず、バラシャン国(Balascian、今のバダクشان地方、第 48 章)とセイロン島(第 190 章)で言及されるだけである。
- 20) ただし、マルコはアジアの他の種々な宗教や土俗信仰をもすべてこの名で呼んでおり、その定義と区別は明確でない：cf. L. Olschki, *op. cit.*。
- 21) マルコにも各地の性風俗の記述がある。とりわけカタイ(中国北部)の女性の貞淑と謙譲を大いに賞賛しているが(第 148 章)、しかし特にイタリアと比較しているわけではない。諸国の淫蕩や珍しい性風俗の報告も多い。
- 22) パレスチナ出身のアメリカの文芸評論家エドワード・サイードの近著『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1986(特に pp. 67-72)にも、ダンテのこのイスラム観の分析がある：「イスラムとその特定の諸表象が西洋の地理的・歴史的・論理的理解、ことに論理的理解の産物であることは不可避的であるが、ダンテがイスラムを詩的に把握するさいの、対象に対する判断と表現の彫琢もまた、こうした図式的かつ宇宙論的とさえいえる見方の然らしめるところである」(p. 69)。
- 23) 例えば、月蝕が全世界で見られたことは、「ユダヤ人のみならずスペイン人にも

インド人にも見えた」ことによって説明される（天・XXIX）。あるいは、最期の審判の日に本物のキリスト者と偽物とを区別する役割をはたす異教徒の総代として挙げられているのは、エチオピア人とペルシャ人である（天・XIX）。

- 24) 辺獄（リンボ）との関連性が注目される（要:辺獄の説明）。この問題はダンテにとって、地獄の最初にまさにそれが故にそこ辺獄に住まねばならぬキリスト以前の古代の哲人たち、ホメロスや彼自身の導師ウェルギリウスを見たときから、「嘶拗に問い続けてきた」疑問であった。

24) * [写本、図 9]

- 25) プレスビテル・ヨーハンネース伝説に関しては、L. Olschki, *op. cit.*; 佐口透編『モンゴル帝国と西洋』平凡社、1970、等参照。 * [拙訳「プレスビテル・イオハンネスの書簡」『原典中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、2019]

- 26) 『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』河野純徳訳、平凡社、1985、p. 471。 1549年 11 月 5 日付、ゴアのイエズス会員宛、日本（鹿児島）上陸後最初の書簡。 もともと、彼らも最後には日本人を不可解な国民としてその理解を諦めてしまったり、嫌悪したりするに至るのであるが。

ついでながら、コロンバスがアメリカインディアンと接して受けた最初の印象もほぼ同じでさらに露骨なものである：

「彼らは武器を持っていませんし、それがどんな物かも知りません。…… 彼らは皆そろって背が高く、顔つきもよく、よい姿をしているのであります。……彼らは利巧なよい使用人となるに違いありません。事実、私が彼らにしゃべることを彼らは皆すぐに口にいたします。私は、彼らは簡単にキリスト教徒になると思います。彼らはどんな宗教も持っていないようなのであります」(前掲『コロンブス航海誌』pp. 38-39)。

- 27) 元朝への最初のローマ教皇庁公式使節で大都の初代大司教に任命されたモンテコルヴィーノ(1247-1328) の中国到着は 1294 年。Cf. オドリコ『東洋旅行記』家入敏光訳、桃源社、昭和 41 年； * [拙訳「モンテコルヴィーノと修道士たち」『原典中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、2019]。

28) * [写本、図 9]

- 29) Cf. R. Wittkower, 'Marco Polo and the pictorial tradition of the marvels of the East', *Oriente Poliano*, Roma, IsMEO, 1957, pp. 155-172.

- 30) 最後に、マルコとダンテは直接あるいは間接に織り合っていたかという興味深い問題が残る。これについてはオルシュキ (L. Olschki, 'Marco Polo, Dante Alighieri e la cosmografia medievale', *Oriente Poliano*, pp.45-66) に詳しい考察がある。

それによれば、直接面識があったという証拠はないが、間接的に互いに相手のことを聞き識っていた蓋然性は極めて高い。その根拠として、まずマルコがダンテの

名を耳にしていた可能性については、ダンテは当時客人として寄寓していた亡命先ラヴェンナのグイド・ノヴッロ・ダ・ポレンタ公の使節として、1321年8月から9月までヴェネツィアに滞在するのだが（その帰路にマラリアにかかって死亡する）、その用向きというのが、アドリア海における海賊行為をめぐるヴェネツィアからの非難・訴訟に対してラヴェンナを代表して弁護するというものであった。マルコは、その名誉ある一市民としての立場からも、また商人としての利害や経験からも、祖国の生命線ともいべきアドリア海の勢力争いというこの問題に関心ではありえなかったであろう。次に、ダンテがマルコの名前あるいはその旅のことを耳にした可能性については、その旅行記がものされてすでに二十年以上、「百万」として広く人の口にのぼっていたし、学者の間でも関心を呼んでいた（例えば、パドヴァの天体学者ピエトロ・ターバノは直接マルコを訪ねて話を聞いている）。天文学者でもあり自然科学者でもあり、その前年に『水陸論』を発表し、地球上のどこかの地点で海が陸よりも高いことはありえるかという問題を（否定的に）論じ、ひいては陸地の隆起の原因や地球の形状について考察していたダンテが、それに関心を引かれぬはずはなかったであろう、と。

それにしてはしかし、神学から自然学までの高尚な学に限らず、俗界の政治・社会状況のみならず貴顕紳士から盗族・娼婦らアウトローのゴシップにいたるまで通じていた当代随一のジャーナリスト、ダンテが、何故かくもユニークな出来事とそれによりもたらされた貴重な情報を、知見の及ぶ限りこの世の森羅万象を書き記そうとしたにもかかわらず採り入れなかったのか、との思いが残る。さらにはまた、『神曲』にはプレスビテル・ヨーハンネースの国やゴグ・マゴグの伝説は登場しないが、神学者でもあったダンテがこれらを知らなかったとは考え難い。

とすれば、古代と中世の典拠と権威に基づきつつ、すでに精緻かつ確固として造り上げた自らの世界像を修正するには、マルコの旅行は、当時ほとんどの人の眼にそう映ったように、ダンテにとってもあまりにも現実離れしていて信じがたいホラと思えたからか、あるいはそこに語られる個々の話はあまりにも具体的・断片的で、単なる事実の羅列であって学ではなく、当時のまたダンテの知の体系を崩すものではありえなかったと同時に、その一部を借用するには今度は、その全体はまさしく彼の宇宙像に根本的修正を迫るものであり、したがってその知の体系を崩さずにはすまぬものでありえたからか。あるいはまた、彼が終生無関心であった東方への陸上による、しかも非難してやまぬ金儲け目当ての通商の旅であったからか（ポーロ一家の旅行のもった宗教的役割についてはもちろん知らなかったことであろう）。ともかく、マルコの東方の旅は、経験的にも詩的にも哲学的にも『神曲』の世界の中のどこにも入り込む場所を見出さなかった。いずれにせよ、もしダンテがポーロのことを知らなかったとすれば、あるいは知っていても無視したとすれば、それは

それでダンテの思想と当時の文化・社会状況を考える一つのよすがともなりえるであろう。

もっとも、『神曲』のいくつかの箇所がマルコにその典拠や影響の求められることがある。まず何よりも、南半球では北極星が見えなくなるという事実であり、例のオデュッセウスの航海のところで：「夜はいまやもう一つの極のすべての星をわれわれに見せ、われわれの極はかくも低くなって、〔北極星は〕姿を現わすことをしなかった」（地・XXVI・127-129）

一方、マルコは帰路小ジャワ島（今のスマトラ島）のところで：「皆さんのだれにとってもびっくりするようなことが一つあるから、まずそれを言っておこう。つまり、この島がとても南に位置しているため、北極星がまったく見えないという事実である」（第 181 章）。それが、セイロン島をう回してインド西海岸コマリ国のところまで来ると：「ジャワ島からここまでずっと見えなかった北極星が、ここからかすかに見え始める」（第 198 章）と証言している。ついでながら、マルコは各国・各地については詳述しても、地球全体の形状についての記述はないが、この箇所はかろうじてそれに関連する一つとなっている。

その他、マルコが帰国後前述のピエトロ・ダーバノに語ったという、南半球で見える「巨大な袋状の尾をもった星」（マジェラン雲のこと）と、ダンテが煉獄島で南極にみる、「人類の始祖〔アダムとエヴァ〕の他まだ誰も見たことのない四つ星」（煉・I・23-24）（南十字星のこと）、ダンテの天宮にある「あまりにも高貴で美しいがゆえにその王国から移すことを許されない多くの宝玉」（天・X・71-72）と、同様に自国からの持ち出しを禁じられている貴金属についてのマルコの記述（バラシャン国第 48 章、マーバール国第 191 章等）、あるいは先にみた、ダンテの「インダスのほとりに生まれた」一異教徒と、マルコの釈迦（「もし彼〔シャカムニ〕がキリスト教徒であったなら、きっと我が主イエス・キリストと並ぶ偉大な聖者となったことだろう」（第 195 章）との関連性、等である。しかしこうした引き当てはキリのないもので、確かな根拠があるわけではない。いずれにしても、こうした問題を含めて、「ダンテとマルコ・ポーロ」という興味深いテーマについては、いつか稿を改めて考察したい。



図5 「神曲」冒頭箇所 (BnF ital. 539, f. 1r, a8-13)

Nel mezzo del cammin / di nostra vita
mi ritrovai per u/na selua obsura,
che la diritta uia / era smarrita.

我が生の歩み半ばに、
我また、暗き森の中にありし、
正しき道見失われたが故。

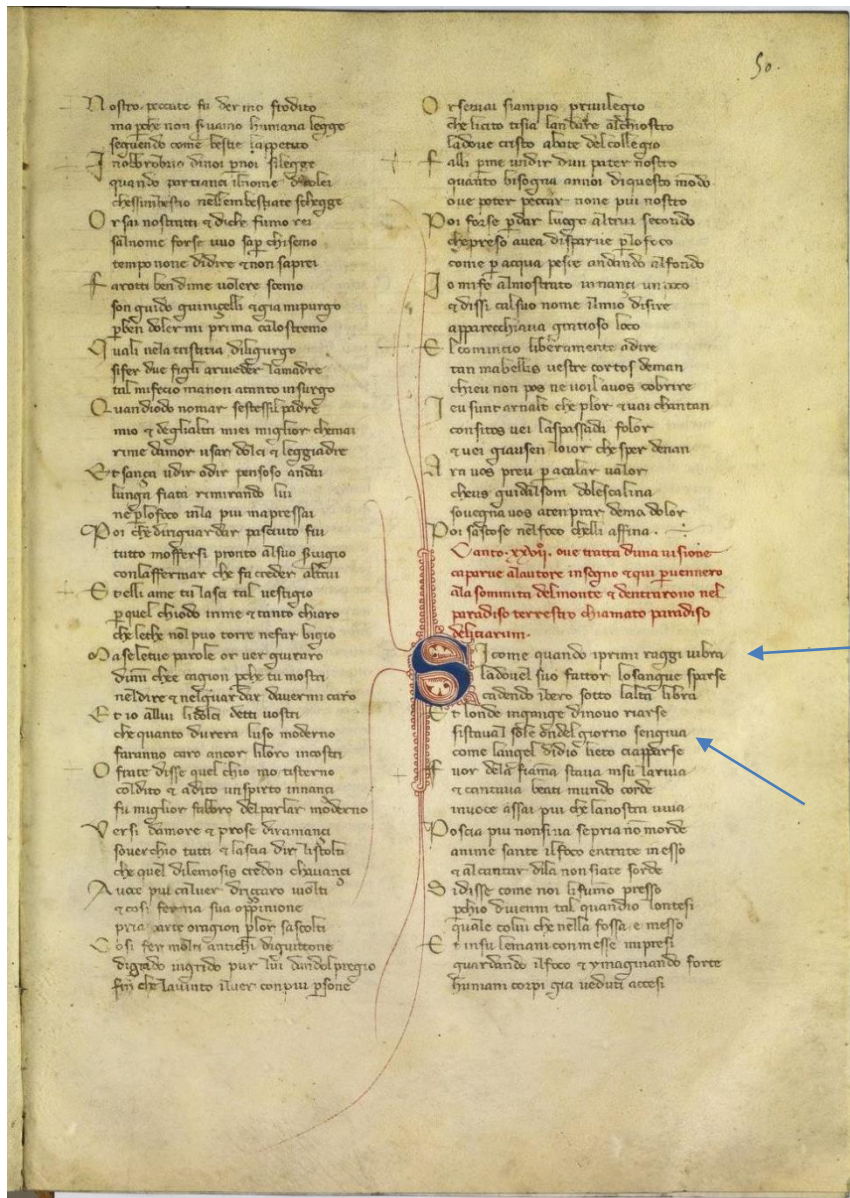


図6 煉獄から見た地球全体像 (BnF ital. 539, f. 50, b28-32.)

Si come quando i primi raggi uibra
la doue 'l suo fattor lo sangue sparse
cadendo Ibero sotto l'alta Libra
e l'onde in Gange di nouo riarse
si staua il sole; onde 'l giorno sen giua

最初の光射す時、
その造り主血を流せし所に、
イベロ、高き天秤の下にあり、
ガンジェの波、再び燃え立ち、
太陽、かくあり。かくて [ここ煉獄]
日の暮れなんとす。

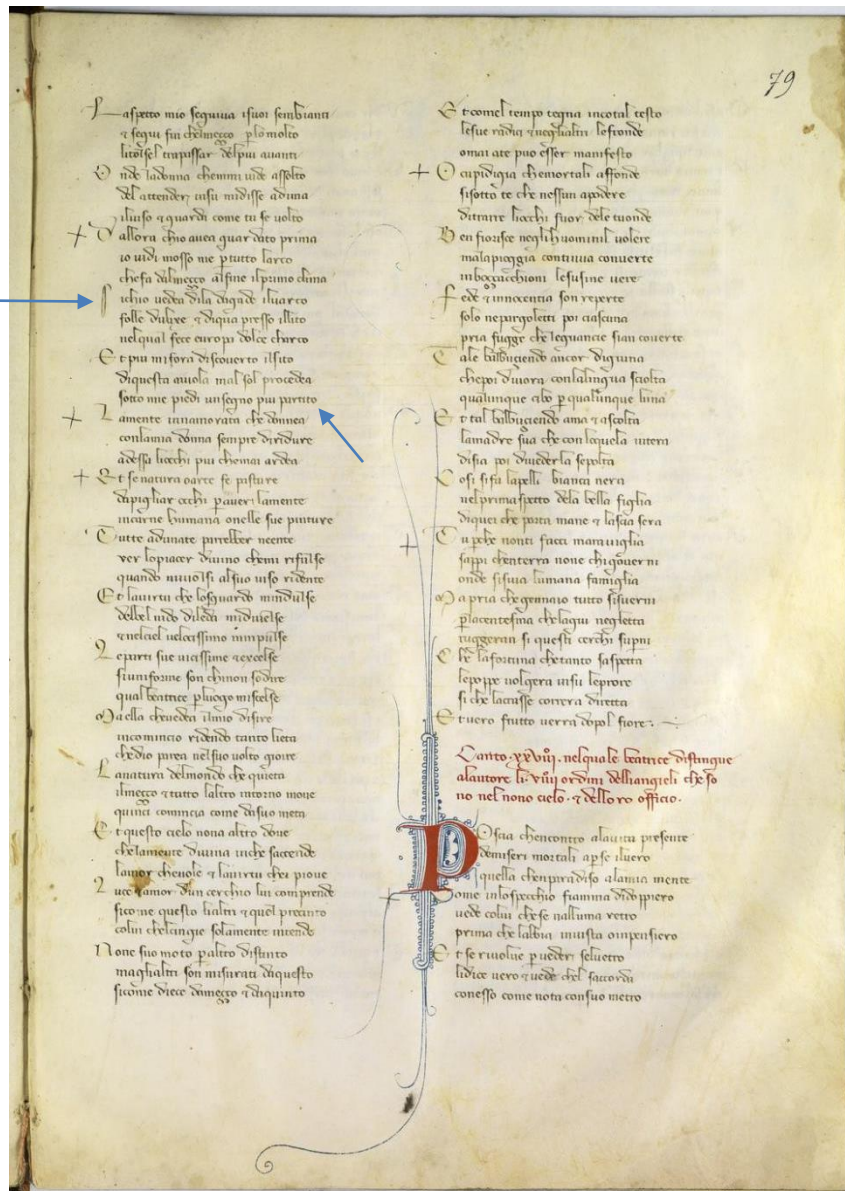


図7 天上から見たヨーロッパ (BnF ital. 539, f. 79r, a10-15.)

si ch'io vedea di la da Gade il varco
folle d'Ulise et di qua presso il lito
nel qual fece Europa dolce charco.
Et piu mi fora scoperto il sito
di questa aiuola, ma 'l sol procedea
sotto mie piedi un segno piu partito.

我見えり、ガーデの彼方、
ウリクセの狂気の船を、して此方、
エウローパ、甘き荷となりし岸近くまで。
我、さらに見えたであらうに、
この小さき麦打ち場の。されど陽は進めり、
我が足元よりさらに離れし天宮を。

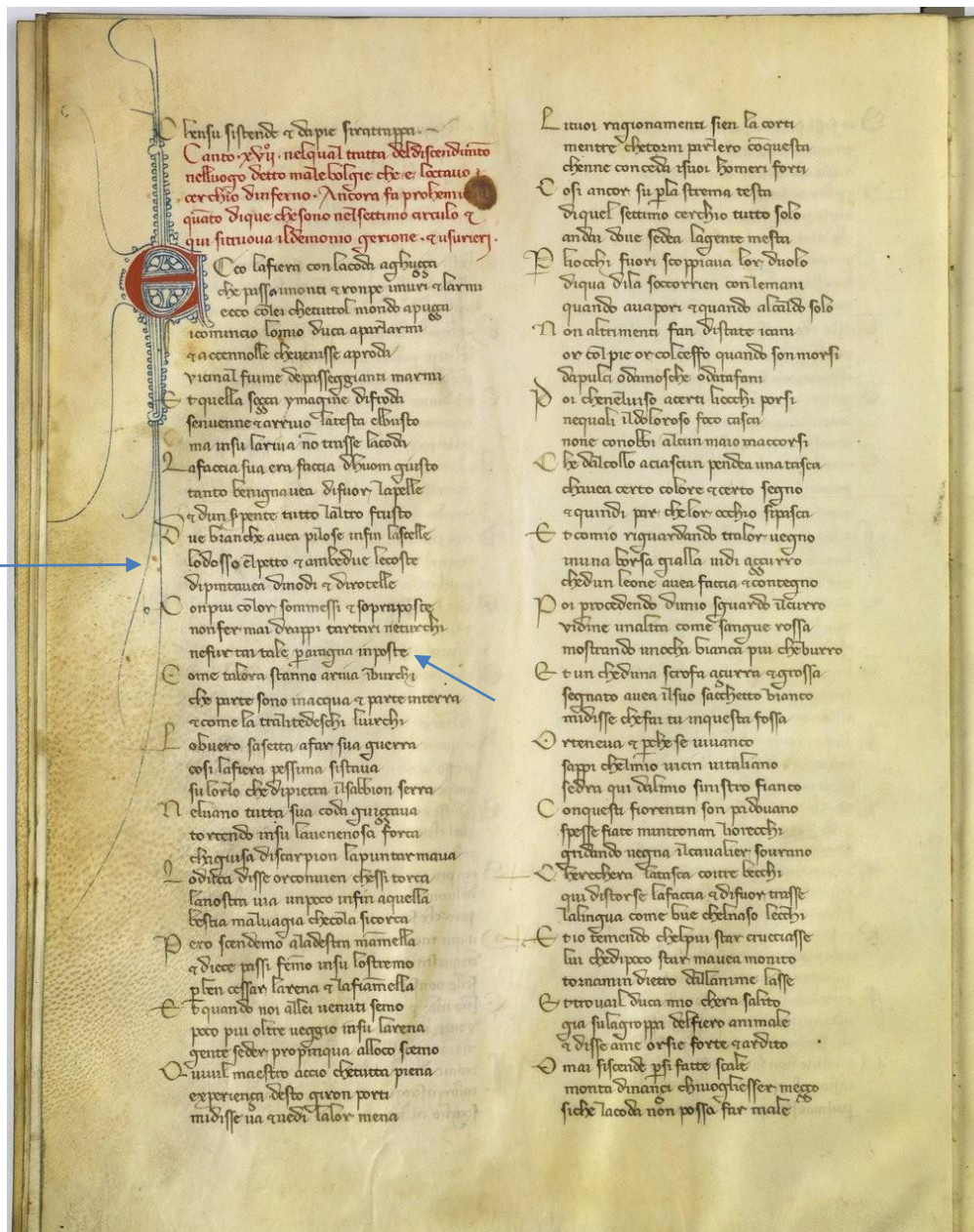


図8 ジェリオーネ・タルタル人 (BnF ital. 539, f. 13v, a20-24.)

Lo dosso e 'l petto et ambedue le coste
dipinti aveve di nodi et di rotelle
Con piu color sommessi et sopraposte,
non fer mai drappi Tartari ne Turchi,
ne fur tai tele per Aragna inposte.

背も胸も両脇も、
描かれてありし、縞と輪。
多彩な色で地も紋も、この錦、
タルタリもトゥルキも造りし事なし、
かような布、アラーニャに織られし事なし。

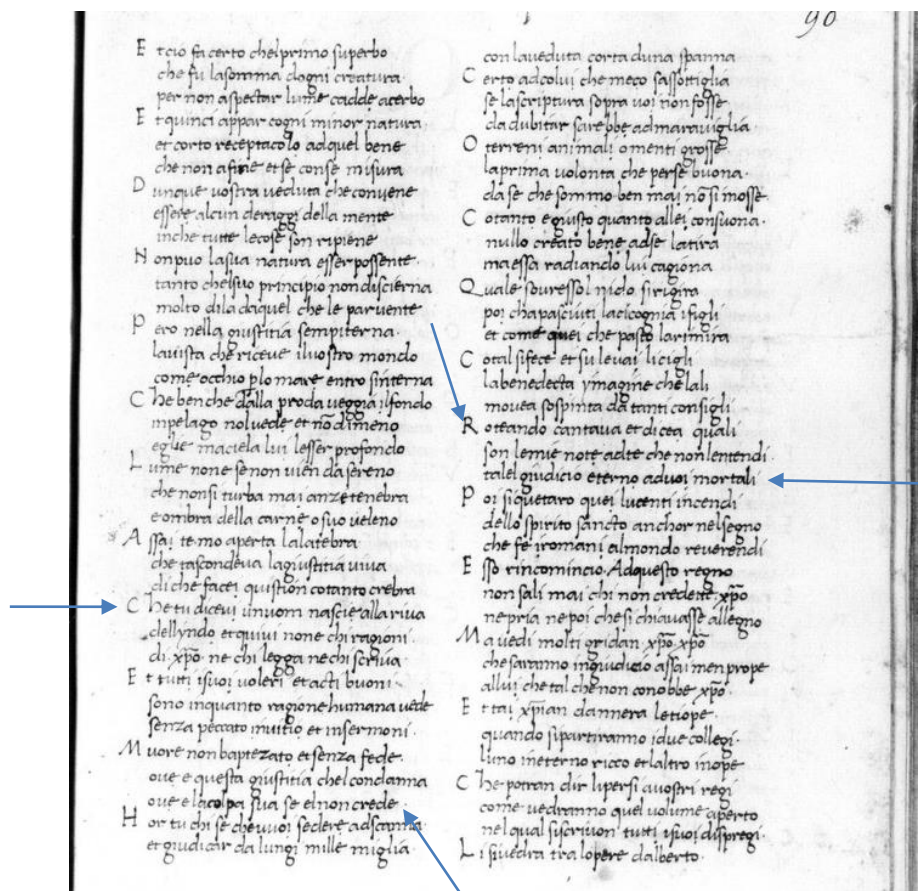


図9 インド人と神の審判 (BNF, ital. 542, f. 90r, a25-33, b17-19.)

Che tu diceui un uom nascie alla riu
dell'Yndo et quiui non è chi ragioni
di Cristo ne chi legga ne chi scriua.
E tutti i suoi uoleri et acti buoni
sono, in quanto ragione humana uede,
senza peccato in uitio[vita] et in sermoni.
Muore non baptezato et senza fede
oue è questa giustitia che 'l condanna
oue è la colpa sua se el non crede.

Roteando cantava et ducea, quali
son le mie note ad te che non le 'entendi
tal el giudicio eterno ad voi mortali.

おぬしは言えり、一人の男生まれる、
インドゥスのほとり、そこになし、
クリストについて語る者、読む者、書く者。
その想い行いすべて善し、
人間理性に照らして見て、
生と言葉に過ちなし。
洗礼されず信仰なく死ぬ、
何処にありや、その者を罰するこの正義、
何処にありやその罪、彼信仰せずとて。

旋回しつつ、歌い言えり、
我が調べの分らぬ其方にとってのごとく、
永遠なる審判、其方ら死すべき者に分らず。

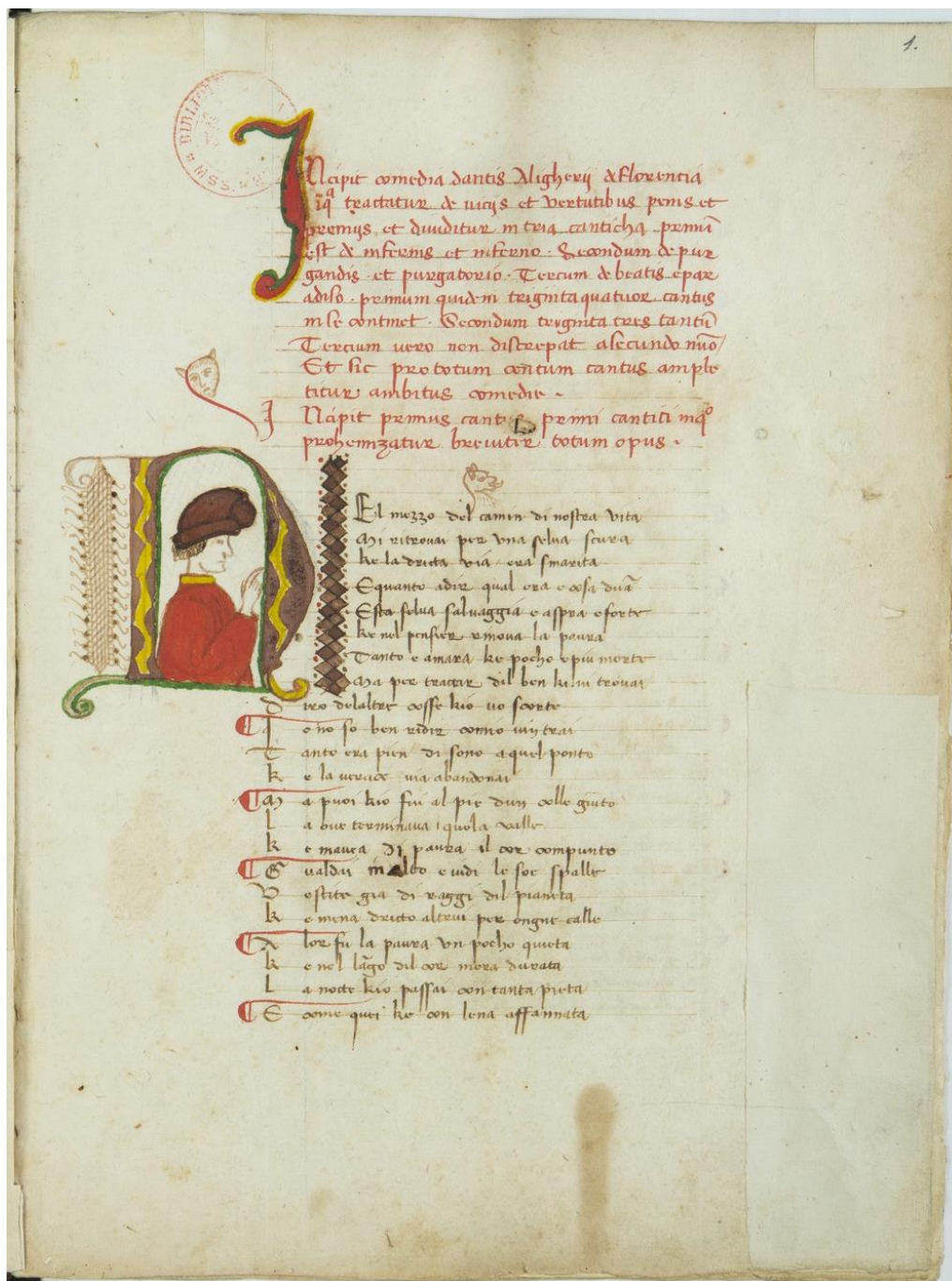


図 10 冒頭箇所・作者（ダンテ）像（BnF, Smith-Lesouef 52, 1r, 1357 年）

Nel mezzo del camin di nostra vita
Mi ritrovai per una selva scura
Che la diricta via era smarrita.

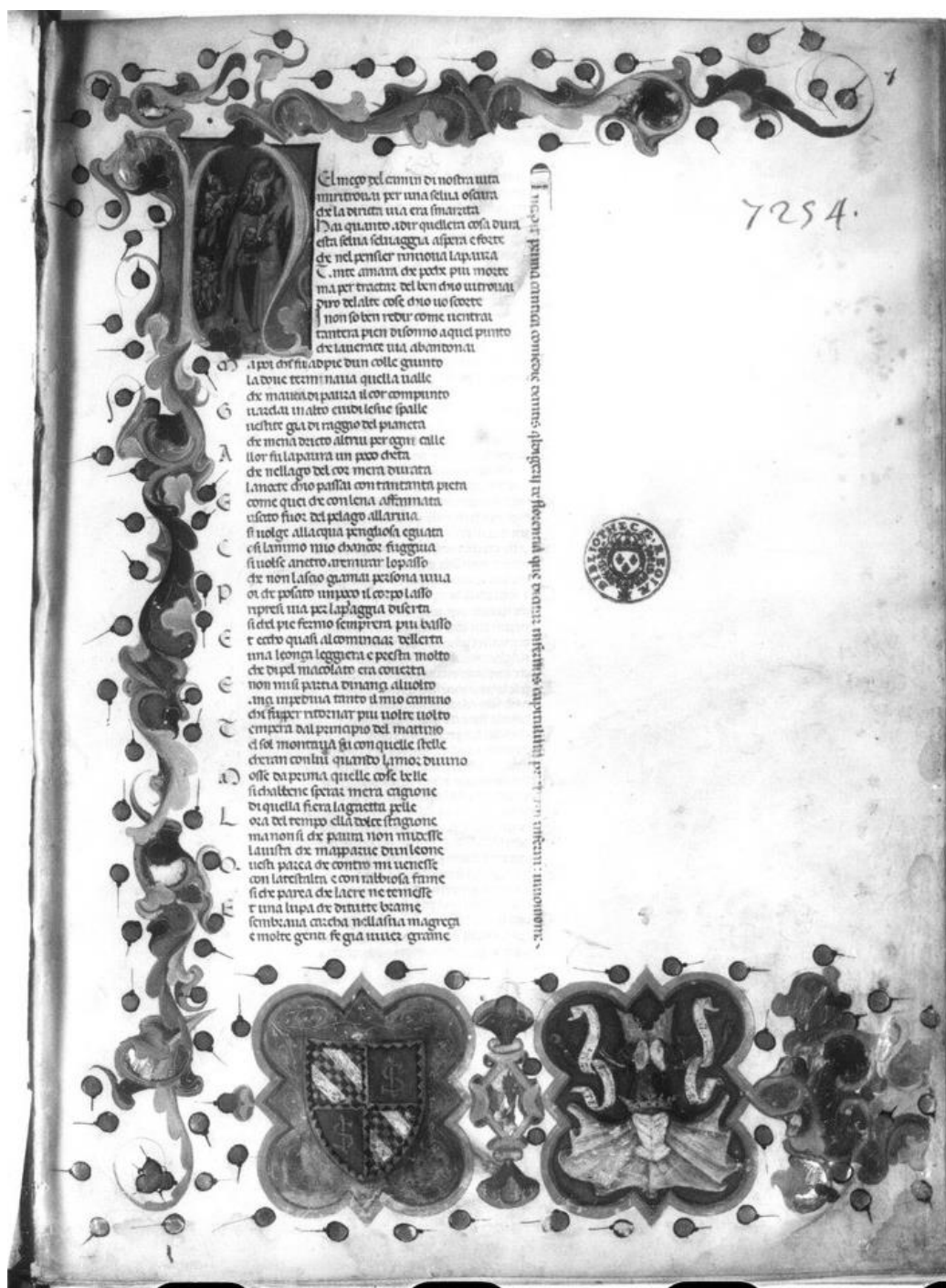


图 11 冒頭箇所 (BnF, ital. 530, f. 1r. 15 世紀)

Nel meço del camin di nostra vita
 mi ritrovai per una selva oscura
 che la diritta via era smarrita.

